

飯島賢二の『恐縮ですが・・・一言コラム』

第 11 回 心が渴いて仕方がない...

もう、随分前の話だが、大沢悠里というパーソナリティが、ラジオであるおばあちゃんの話を紹介していた。正確な記憶は定かでないが、およそ以下のような内容だった。

..... 身寄り頼りの無い、全くの一人暮らしのおばあちゃん。近所での評判は頗る（すこぶる）悪い。

「ねえ、知ってる？最近変なおばあちゃんがいるの。一人でふらふらして、来る人来る人やたら話しかけて、みんな、気持ち悪がって、誰も近寄らないですって...」

スーパーの店員は、おばあちゃんの姿を見ると、いそいそと別の方向へ行ってしまう。誰一人おばあちゃんに近づこうとしない。

ある人が不思議に思い、恐る恐る、そのおばあちゃんに聞いてみた。「おばあちゃん、どうして全然知らない人に、やたら話しかけるの？」。皺しわだらけの顔を上げ、おばあちゃんはおもむろに語り始めた。

「心が渴いて、仕方がなかったんです。私は独り（ひとり）ですんできます。ここ1週間、誰とも話をしていないんです。昔は商店街へ来ると、魚屋のおじさんが、おばあちゃん、風邪直ったって、声をかけてくれました。駅へ行くと駅員さんが、切符どこまでって言ってくれました。今は何もかも便利になって、自動販売機で、切符もお茶も、お金まで出てきて、そりゃ、結構なことですが、一言も話すことが出来ません。誰かとお話がしたくて、声をかけていたんですが、ご迷惑なことですね。」心が渴いて仕方がない...そう呟（つぶや）きながら、踵（きびす）を返すおばあちゃんの後姿は、驚くほど小さく、悲しそうにみえた。.....

情報化だ、ITだと言って、世の中益々、コンピュータ中心になりつつある。かく言う小生も、毎日のようにディスプレイと向き合い、ワードだ、エクセルだ、それメールを送れと格闘している。ICカードがより普及し、情報が、独り歩きで氾濫する時代。遅れないよう頑張っているのが、現実の今日この頃である。しかし、そうなればなるほど、肉声を通したコミュニケーション機会は減少していく。正に「ディスコミュニケーション」化時代の到来となれば、先ほどのようなおばあちゃんが、全国いたるところに、生まれてきてしまうかもしれない。

肉声としての言葉を使い、目と目を見つめながら、心と心を通（かよ）い合わせ、身体と身体を通した触れ合いこそ、有史以来、人間という動物だけが有する、「コミュニケーション」という貴重な財産であったはず。今、この時代こそ、コミュニケーションの大切さを再認識し、むしろより活発に、人と人とのコミュニケートを展開すべき時である。